

魔理沙の「喧騒郷」探訪記

ゆでジャガ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魅魔の結界の外に出たい一心で、「喧騒郷〈けんそうきょう〉」入りすることになった魔理沙。幻想が失われ喧騒が占拠する恐るべき世界、喧騒郷で魔理沙は生きていくことができるのか？金と計略と労働にまみれつつも牧歌的なファンタジー。

※この作品は東方projectを原作とし、基本設定および登場人物なども原作に準拠しておりますが、コンセプト上取り扱う世界は幻想郷ではなくパラレルワールド「喧騒郷」であるため、登場人物の思考や関係に若干の改変がある場合がございます。ご容赦くださいませ。

目次

序幕 喧騒入り	1
第一幕 御金異変	3

序幕 喧騒入り

「魅魔様が言う、けんそうきょう 喧騒郷、へ行ってみたい」

唐突な弟子の言葉に、魅魔は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする。

「あー：魔理沙君、いきなり何を言い出すんだい？」

「この世界の外には、喧騒郷、が広がっている、魅魔様そう言ったのだろ」

魅魔も、まさかあの発言が魔理沙の耳に焼き付いていたとは思わなかった。

それも一番弟子であると同時に、一番聞き分けがなく、未だに敬語も使えない魔理沙の耳に！

「：確かに私はそう言ったがね。」

魅魔は、喧騒郷、という世界にいい思い出がなかった。それゆえに魅魔は今、喧騒郷から離れた別空間に住んでいる。気に入った人間の子たちを喧騒郷から連れ出し、わざわざ自らの魔力で造り出したこの大結界内に連れ込んで、修行という名目でかわいがっているのだ。「確かに喧騒郷はあるし、行くのもたやすい。しかしだね、まだ修業が…」

「修行が残っていると言うんだろ？ 私はそうは思わないぜ。この小さな世界の全てを私は知ってる。どの小屋に誰が住んでいて、どういう修行をしていて、どこに魅魔様がおやつを忍ばせているか。」

最近のおやつをつまみ食いの犯人はこいつか、と魅魔は思ったが、今はそんな事は問題ではない。

「私はこの箱庭にこれ以上閉じこもりたくない。外の世界を見てみたい、それだけだ！」

物心ついてから何年もの間、この狭い結界内に逼塞していたのである。少女の好奇心が結界の外へ向くのも当然だろう。これが普通の弟子の言葉だったならば魅魔も笑ってごまかしたが、相手は魔理沙なのでそうもいかない。

「：はあ。」

一度食らいついてきた魔理沙を理屈で抑え込むのは不可能である。

魅魔は諦めのため息を漏らした。

「分かった。望み通り喧騒郷に行かせてやる。」

魅魔は手に持つ銀色の杖を天に掲げ、早口で魔法を詠唱し、不可思議な印を切った。杖の先端部が光り輝き、結界の天井にぽっかり穴が開く。

「ひとつ忠告しておく。喧騒郷は、私が見放した故地だ。そこにお前は一人で行く。これがどういう意味だか分かるかい？」

「楽しいピクニックにはならない……ってことか。まー大丈夫、私は魅魔様の修行を完璧にこなしてきたからな」

ここにきても魔理沙は単細胞なためか、全く不安の色を見せない。魅魔はかえって感心してしまった。よく考えれば、魔理沙も元は喧騒郷にいた孤児。それを魅魔が拾ってこの結界内へ移動させていたのだから、魔理沙は喧騒郷に行くことで、本来いるべき世界に戻ることになる。

「もうここへ帰ってくることはあるまい。餞別にこれを渡そう。『ミニ八卦炉』と『魔法のホウキ』だ」

魔理沙は受け取ったミニ八卦炉を、いつの間にも用意したのやら分からない、肩に担いだ大きな荷袋にしまった。

「今まで世話してくれてありがとな！魅魔様も達者で暮らしてくれ！ほんじゃ！」

魔理沙は貰ったホウキに跨って飛び上がると、大きな帽子を軽く持ち上げ会釈をし、そのまま穴の中へ消えていった。

「…ふう、厄介払いができて清々したな。これからは奴に気兼ねなく修行を行えるぞ。ハハハ：ハハ：」

魅魔は、自分にできる精一杯の笑顔を作りながら、小さく肩を震わせた。目元はちよつと、にじんでいた。

第一幕 御金異変

ここは喧騒郷の最果て。荒れた大地に、グギユウウ…という地鳴りがこだまする。しかしよく聞けばそれは地鳴りではなく、荒野をトボトボと歩く魔理沙の腹の音であった。

(腹減ったなあ…)

長年に渡り狭い結界内で暮らしてきた魔理沙にとって、喧騒郷は全く未知の場所。そこでの食糧探しがうまくいくはずもない。あてもなく彷徨っていると、一種の悔恨の念すら湧いてくる。

(魅魔様に食い物の在処くらいは聞いておくべきだった)

しかし負けず嫌いの魔理沙の頭に、魅魔の結界に出戻るという選択は存在しない。何も考えずとにかく前へ、前へ、前へ。それが魔理沙の信条であり、今なすべきことである。

(ホウキで飛んで空から見てみるか? いや、魔力の浪費は避けたいな) もう何里歩いたであろうか、魔理沙はほとほと疲れ切ってしまった。そんな中、どこからともなく香ばしい匂いが漂う。

(…i…これは食い物の匂いだ! この森の中か!?)

魅魔のおやつ隠し場所も嗅ぎ当てた魔理沙は、鼻には若干の自信がある。匂いの源を探し、魔理沙は森に入ってしまった。

(しかし喧騒郷は聞きしに勝る凄いとこらだ。魅魔様の結界には数本の木しかなかったが…)

何しろ魅魔の結界は1ヘクタール程度である。魅魔が喧騒郷から持ち込んだ低木と、水たまりくらいの広さしかないため池、あとは修行中の弟子たちが住む小屋くらいしかなかった。それが喧騒郷ではどうだろう。空はどこまでも広がり、草本から高木まで大小さまざまな植物が咲き誇る。きつと池もとんでもない広さのものがあるのだろう。魔理沙は茂みをかき分けながら、そう思った。

(おっ…i…あれか)

茂みや樹木がない開けた場所があった。いわゆるギャップである。真ん中にパチパチと音を立てる薪があつて、その上には蒸気を吹く鍋がどっしりと置かれている。

(匂いから察するに、あれはシチューの類だな)

魅魔はグルメで、境界内で営む菜園から野菜を収穫したり、喧騒郷から人さらいのついでに食材を失敬してきたりしては、バラエティに富む料理を作って弟子たちに振舞っていた。その知識が魔理沙にも受け継がれていたのだ。

(腹が減ってるのはお互い様だ。少しばかり頂いても構わないだろう)

目の前でコトコト…と煮込まれるシチューに、魔理沙はどうも辛抱ができなくなった。思わず鍋に駆け寄り、手を伸ばす。

その刹那、魔理沙の視界にキラリと光る線のようなものがちらついた。次の瞬間、その線を伝い小さい何かが突進してくる！

「うわっ!？」

修行の成果だろうか、魔理沙は反射的に後ろへと飛び、その物体をかわした。物体がそのまま木へ激突すると、ドスッ!という音が響く。よく見てみれば、物体は人形であった。その手には、鋭利な槍のようなものが握られている。魔理沙の背に冷や汗が垂れた。

(ありや一体何なんだ…?)

「それは私の昼食なの。触らないでもらえる?」

魔理沙が声の聞こえた方を向くと、魔理沙と同じ金髪、それでいてショートヘアの少女が立っていた。それ以外の出で立ちとは全然違うが、何となく同じ雰囲気のようなものを魔理沙は感じ取った。

「運が良かったわね。それ、シチューを守るための罠だったんだけど」
どうも先ほどの殺人人形を仕掛けたのはこの少女らしい。魔理沙はさっそく、喧騒郷の洗礼を受けたのだ。

「あー…あのよ、私、腹減ってんだけど。そのシチュー分けてくれないか?」

先ほど命を落としかけたというのに、魔理沙は無謀な提案を試みる。少女はあきれ顔で答えた。

「そのシチューは私が食べるんだからダメよ。シチューを食べたいなら、人里の店で、お金、払って食べることね」

魔理沙にとって、少女の言葉には突っかかるものがあった。魔理沙

は魅魔から教わった言葉は全て記憶していると自負しているが、お金、というのは聞いたことがない。思わず、こう質問した。

「…、お金、って何だよ」

少女は一瞬キョトンとした顔をした後、先ほどよりもさらにあきれた声を出した。

「はあ…？ 貴方まさかお金を知らないの？ 情報弱者にも程があるでしょう…今までどうやって生きてきたのよ？」

魔理沙は自分の境遇を説明した。少女は魔理沙が喧騒郷の常識を知らないことを理解したようだ。

「…いい？ お金というのは、この喧騒郷で生きるために絶対に必要なものよ。これがなければ、毎日の食事のままならない」

魔理沙にとつて食事とは、魅魔が毎日朝・昼・晩と弟子たちに出してくれるものである。話がまいち理解できない魔理沙の前で、少女は一枚の紙を出した。

「これがお金。『1000円』って書いてあるでしょう。『500円』『1000円』『1万円』なんてのもある。それぞれの紙が、書いてあるだけの価値を持つのよ」

魔理沙は首を傾げる。このままでは一向に理解されないと感じたのか、少女は魔理沙を森の外へと連れ出した。茂みを抜けると、そこは先ほど魔理沙がいた荒野とはまた違った場所である。ちょうど魅魔の結界にあるような小屋が何軒か並び立ち、その中の一つがのぼり旗を立てている。「パン」という二文字が、たどたどしい字で書かれていた。

「これが店。お金を使ってモノを、買う、場所よ。ここをよく見なさい、買える品目が値段と一緒に書いてある」

あんパン50円、焼きそばパン100円、コロッケパン150円…どれも魔理沙が一度は食べたことがある料理の名前だが、その後ろの数字と「円」の意味が分からない。

「焼きそばパン1個ちょうだい」

「はいよー100円ね」

少女の言葉に店の主人が答え、焼きそばパンを一つ差し出す。そし

てそれと交換するように、少女は先ほどの「100円」の紙を差し出した。

「これで売買成立。要するに、この世界で食べ物が欲しかったら店に行って、店側が提示する額と同じだけのお金を渡しなさいってことよ」

言葉にして表すと、これは中々に難しいシステムである。ましてや今までお金という概念に触れてこなかった魔理沙にとっては。だが幸いなことに、魔理沙は修行の一環として数桁の算数計算は習得していた。少女は焼きそばパン片手に、さらに「お釣り」の話などを持ち出してきたが、魔理沙は何とか理解した。

「ふーむ…なんとなく分かった。じゃあそのお金ってやつは、どこに落ちてるんだ？」

「落ちてるんならどれだけ楽な事か。お金は労働、すなわち誰かのために働いて、その対価として受け取るものよ。」

「働く」という言葉についてまた魔理沙が聞き、アリスが答えた。要は誰かの指示通りに動いて成立する、苦しい営みなのだ。

「ここは町の郊外。あつちの方角に一里ほど歩けば人里があるわ。そこなら求職のポスターやらがあるはず。それを見て、指定の場所に行きなさい。あとは雇い主の命令通り動いていけば、なるようになる」

とにかく、お金を手に入れるのは非常に面倒くさいことらしい。魔理沙はある程度、喧騒郷の理を知った。

「あと、この焼きそばパンは貴方にあげるわ」

「え？私、交換する100円を持ってないぞ？」

少女はぷつと笑い、面白いものを見るような眼をして言った。

「ただの物の受け渡しなら、お金なんていらぬのよ。そう、本当はお金なんて…」

少し言葉に詰まった少女は、すぐに話題を焼きそばパンに戻した。「ま、とにかくこれを腹の足しにして行きなさい。貴方なら、この喧騒郷で生きていける気がするわ」

「お…おう、色々ありがとうな。そういや、まだ名前を聞いてなかったが…」

「私はアリス。ただの人形遣いよ」

少女はそう答えると、そのまま森の中へと消えていった。魔理沙は焼きそば。パンを握りしめ、こう思った。

「働かなきゃ、な……」